理事会セッション

社会と“対話”するために学会が取り組むことは？ ～学会内外の活動からの視点～

How should the AESJ tackle to "dialogue" with society?

～ Viewpoint from activities inside and outside the AESJ ～

(5) 説明と理解から聞く力と相互理解へ ～本当のリスコミを始めよう！

(5) From dialogue and understanding, leading to listening and mutual understanding:

Let's start the real risk communication!

*土屋 智子

一般社団法人複合リスク学際研究・協働ネットワーク

1. 住民とのリスクコミュニケーション活動からの学び

1999年に発生した臨界事故を契機に、東海村で住民主体のリスクコミュニケーションを目指して2021年3月まで活動してきた。活動の中心は、原子力事業所への見学と安全対策に関する提言である。東海村の多様な原子力関連施設および村役場やオフサイトセンターなどにも赴き、住民の疑問や要望を伝えてきた。これらの活動を通じて私自身が学んだことは、住民の意見は原子力の安全に役立つということである。ただし、私自身も含めて、住民が何を望んでいるのかを聞き取る力が求められる。一方で、聞く力、聞き取ろうとする姿勢のある事業者や行政職員は、住民から信頼を得る可能性が高い。事業者や行政との話し合いの場に参加する人々は、自分たちの懸念や要望を“説明”し、“理解”してほしいと考えているからだ。

2. 「説明」と“対話”やコミュニケーションの違い

原子力業界にとって切実な信頼回復に聞く力が役にたつのは、聞くことが“対話”やコミュニケーションを成立させる要だからである。コミュニケーションとは、「情報やメッセージの伝達およびその解読の過程の総称であり、送り手の伝える行為やその伝達内容だけではなく、受け手の理解や解釈を含めたプロセス全体」と定義されている。コミュニケーションが成立したとは、送り手と受け手との間で、自分の伝えた意味や意見や立場が伝わったと主観的に認識し、かつ実際に相手にもそう受け止められているという前提を置くことを意味する。この前提のためには、「相手の反応から修正・制御を通じて差を縮小するフィードバック・プロセスが必要」である。「説明」にはフィードバックがほとんどない。「理解」は相手への要求である。他方、修正や制御のフィードバックに不可欠なのが相手を理解しようとする聞く力であり、フィードバックによってのみ、相互理解が可能となる。現在のリスクコミュニケーションは、この極々当たり前のコミュニケーションの成立を目指す考え方である。

3. 誰と何をどのように“対話”することが必要か

私がリスクコミュニケーションを学ぶようになったのは、ある電力会社からの「自分たちの主張が社会に受け入れられにくくなってきた理由を解明してほしい」という依頼からだった。木下富雄京都大学名誉教授が日本にリスクコミュニケーションの考えを紹介されてから、30年以上、原子力業界は“社会との対話”を目指してきた。そして、何度目かの今回のセッションテーマである。何かに取り組む前に、これまで何をを行い、どんな成果と失敗があり、どう改善するのかが分析されているのだろうか。例えば、“社会”という相手は存在しない。誰を対象にするのかが明確になっているのだろうか？ 最も対話が不足しているのは、組織内部の人々ではないだろうか？ また、“対話”の目的は何だろうか？ 今も昔も学会側の主張や考えを“説明”し、学会側と同じように“理解”する人を増やすことを目指しているのではないだろうか？ これらの疑問に取り組むことが、目先の手法を学ぶより重要ではないだろうか。

*Tomoko Tsuchiya

Transdisciplinary and Open Network for Risk Research and Collaboration